

多収品種「そらみずき」、「そらみのり」、 「そらひびき」、「そらたかく」の育成

1. 研究の背景と研究開発目標

日本の大豆単収は約160kg/10aと米国等の主要生産国の半分程度で、多収品種の育成により単収を高め、国産大豆の安定生産、安定供給を図ることが強く望まれている。そこで、これまで開発してきた多収系統から農家圃場で300kg/10a以上、または、標準品種対比で120%以上の子実収量で豆腐に利用できる実用品種を1以上育成する。

2. 研究開発成果の概要

①現地試験による極多収系統の選抜

これまで開発してきた多収系統について農家圃場に用いた現地実証試験等の栽培試験を行った結果、「そらみずき」、「そらみのり」、「そらひびき」、「そらたかく」で多収性が確認されたことから、これらの品種登録出願を行った。上記系統は複数の現地試験で300kg/10a以上、または、標準品種対比120%以上の多収で、各県の奨励品種決定試験においても多収であった。

②さらなる極多収を実現する新規系統の開発

①で品種登録出願した品種は多収であるものの、粒大や粒形といった外観特性、病虫害抵抗性、耐倒伏性、成熟期等に改善の余地があり、これらを改善した多収品種の育成が期待される。2～3年後の品種化が期待される系統として、早生で白目の「関東系統A」（東北～北陸地域向け）、半わい性で耐倒伏性に優れる「九州系統B」（関東～九州地域向け）を開発した。

③新品種普及に加速化する取組み

①で品種登録出願した品種はこれまでの品種とは生育や品質の特性が異なるため、農研機構が公設試、生産者、JA全農等の集荷業者、実需者等関係機関と調整し、主体的に普及に向けて取り組む必要がある。上記関係者を交えた現地検討会等を通じて各々の普及見込み地域で合意形成に取り組んだ結果、「そらみずき」で2箇所、「そらみのり」で2箇所の実用栽培が実現した。

3. 社会実装の展望と波及効果

極多収品種の広域な普及を見据えて

広域適性を有し、既存品種より2～5割程度多収となる新品種を4つ育成した。種子生産は民間の種子生産法人、流通は卸業者、販売先は実需者と調整・連携し、「そらみずき」は関東で1箇所、東海で1箇所、「そらみのり」は九州で2箇所を実用栽培を開始している。その他の2品種についてもR6年度以降の実用栽培が始まる見込み。プロジェクト終了後には育成品種の栽培マニュアルを作成し、公表する予定で、より一層の品種の普及の加速化に取り組む。

研究課題名 : 大豆生産基盤強化のための極多収品種の育成

課題実施機関 : 農研機構・作物研究部門、東北農業研究センター、西日本農業研究センター、九州沖縄農業研究センター、中日本農業研究センター

問い合わせ先 : <https://www.naro.go.jp/inquiry/index.html>

極多収品種「そらみずき」、「そらみのり」、 「そらひびき」、「そらたかく」の育成

(研究課題名) 大豆生産基盤強化のための極多収品種の育成

研究開発目標

日本の大豆単収は約160kg/10aと米国等の主要生産国の半分程度で、多収品種の育成が強く望まれている。そこで、これまで開発してきた多収系統から、農家圃場で300kg/10a以上、または、標準品種対比で120%以上の収量で豆腐等の利用できる実用品種を1以上育成する。

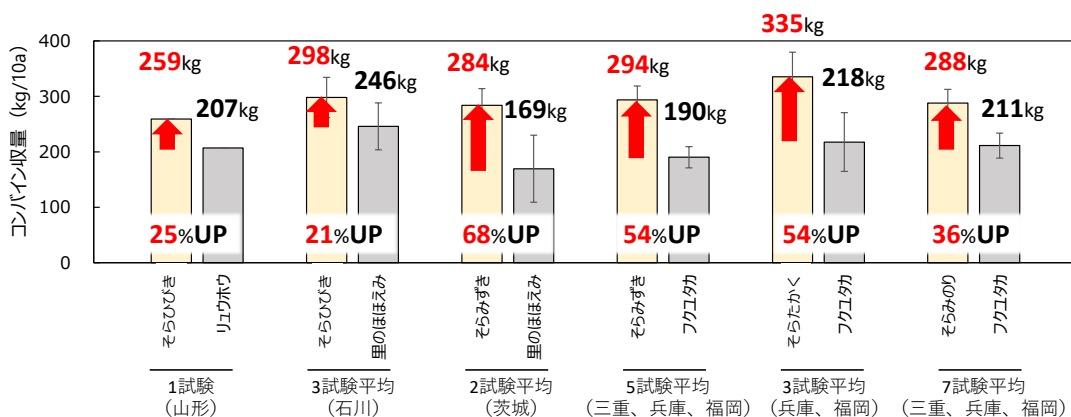
主要な研究開発成果の概要

農家圃場で現地実証試験を行った結果、「そらみずき」、「そらみのり」、「そらひびき」、「そらたかく」で多収性が確認され、これらの系統の品種登録出願を行った。



育成した品種は
いずれも比較品種
よりさや付きが
良い

図 成熟期の草姿



いずれの品種も
300kg/10a以上、
または標準品種
対比120%以上
の子実収量を実
現した

図 現地実証試験における収量の比較 * エラーバーは標準誤差を示す

社会実装の展望と波及効果

広域適性を有する多収品種を4つ育成した。種子生産は民間の種子生産法人、流通は卸業者、販売先は実需者と調整・連携し、「そらみずき」は関東で1箇所、東海で1箇所、「そらみのり」は九州で2箇所実用栽培を開始している。プロジェクト終了後には育成品種の栽培マニュアルを作成し、公表する予定で、より一層の品種の普及の加速化に取り組む。